

# 有島武郎と朝鮮メディア<sup>1</sup>

## — 情死事件を手掛かりとして —

丁 貴 連

### I. 海を渡った有島の情死事件

#### 1. 有島の情死を速報した海外メディア

一九二三年六月九日、有島武郎は『婦人公論』の記者、波多野秋子と軽井沢の別荘で縊死心中を遂げた。当時、有島は北海道の有島農場を小作人に無償開放するなど、隆盛に向かってプロレタリア文学に対し、有産階級出身の自らの去就を追求した思想家、文学者としてだけでなく、妻に先立たれて以来再婚もせず、三人の遺児を思いやる「人格者」として、若い知識人や女性読者の間で絶大な人気を博していた。その彼が人妻と情死し、一カ月に遺体で発見されたのである。「社会的良心の化身<sup>2</sup>」と思われていた作家の異様な末路に世間は驚愕し、死の是非をめぐって賛否の議論が沸騰した。

有島の個人雑誌『泉』から、『女性改造』『婦人公論』『婦人の友』『婦人画報』『婦人倶楽部』などの女性誌、さらには『愛聖』『改造』『解放』『種まく人』『中央公論』『早稲田文学』といった一般総合文芸雑誌に至るまで次々と特集号を組み、有島の死を様々な角度から追悼した。それらを一瞥すると、情死という行為には非難のまなざしを向けつつも、彼を死に追い込んだ思想的苦悩そのものには同情する論調が強い<sup>3</sup>。しかし、この事件を見つめる世間一般の評価は厳しく、とりわけ教育界では心中事件を起こし

た有島の作品を教科書から削除すべきであるという非難の声が噴出<sup>4</sup>し、排撃の嵐は日本全国へと広がった。その騒ぎは二か月後に起きた関東大震災まで続いたが、実は、有島の情死事件は朝鮮や中国、アメリカといった海外でも報道されていたのである。

その第一報を伝えたのはアメリカである。日本での遺体発見第一報が報道された翌日の七月九日、『シカゴ・デイリー・トリビューン』がいち早く報道したのをはじめ、翌一〇日には『ザ・ニューヨーク・タイムズ』と『フィラデルフィア・イブニング・ブレディン』が、それぞれ「三角関係が原因で東京の小説家と人妻が自殺」、「心中で恋人同士が死ぬ／ハヴァフォードの卒業生と女性が日本で生命を絶つ」という見出しで報道している<sup>5</sup>。いずれも二〇行前後という短い記事ではあるが、遙か日本で起きた一小説家の自殺事件を、アメリカを代表する新聞各社がリアルタイムで取り上げていたことは、この事件に対する当時のアメリカメディアの関心の高さを窺わせる。

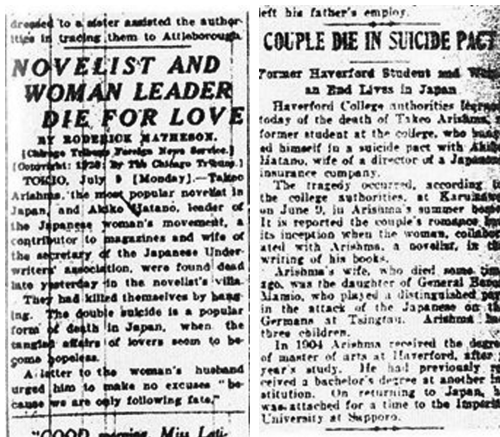
1 本論文は、2015年度（平成27年度）科学研究費補助金（基盤研究C）「方法としての有島武郎—1920年代の朝鮮における女性・子供・労働者の表象」（課題番号15K02239）の成果の一部である。

2 亀井俊介『有島武郎』（ミネルヴァ書房、2013年）295頁。

3 安川定男『悲劇の知識人 有島武郎』（新泉社、1990年）256頁。

4 高山亮二「教科書における有島武郎—その自殺の位置側面として」（『北海道高等学校研究紀要』11号、1974年4月3月）。

5 栗田廣美「有島武郎の心中をめぐる、アメリカでの報道」（鹿児島短期大学『研究紀要』38号、1986年10月）。



【図1】左「シカゴ・デイリー・トリビューン」(1923年7月9日付)、右「フィラデルフィア・イブニング・プレティン」(1923年7月10日付)<sup>6</sup>

次に、朝鮮ではアメリカより一日遅れた七月一〇日、『東亜日報』が「自己の作品『死とその前後』の舞台面をそのまま実現した有島武郎氏の情死事件」という見出しで、「朝鮮の青年たちの間でも多くの敬愛を受けた有島武郎氏」が、婦人記者と不倫の末に軽井沢で縊死心中を遂げたと報道している。

一方、在朝日本人を対象に発行されていた日本語新聞『京城日報』が日本国内の報道に一日遅れた七月九日、有島の自殺を報じている。しかも「小説家有島武郎氏／軽井沢で愛人と情死／腐爛せる死体を別荘から発見／女元代議士の夫人」というショッキングな見出しで情死の真相と有島の略歴などを報道したのを皮切りに、翌一〇日には、家族に残した遺書の一部と心中相手の女の略歴と出自、葬式の様子などが報道されている。一二日には波多野春房の存在が有島と秋子を死に追いやったことが報じられ、一三日は遺児三人と母堂の姿が映った告別式の写真を掲載している。最後の一四日は死の是非をめぐる国内外の反応などを報道している。つまり、七月九日から一四日までの間、一日だけを除いて毎日有島の死に関する記事

6 栗田廣美『亡命・有島武郎のアメリカーくどこでもない所への旅』(右文書院、1998年)口絵。

を報道していたのである。『京城日報』の有島の情死報道は、その情報量においても、期間の長さにおいても朝鮮メディアを圧倒し、『東亜日報』の報道では得られない多くの情報を提供していた<sup>7</sup>。

そして、中国ではアメリカや朝鮮と違い、事件そのものは報道せず、白樺派文学に強い関心を持ち、とりわけ有島の作品を愛読し中国文壇への紹介に熱心だった周作人が有島の自死の報に接して書かれた追悼文を、アメリカや朝鮮の報道に遅れること一週間後の七月一七日、『晨报副鐫』に掲載した。

## 2. 海外メディアの反応

これらの一連の報道からまず驚くのは、アメリカメディアの反応の「早さ」である。中国や朝鮮と違い、一九二三年七月当時、アメリカに翻訳紹介された有島の作品は一編もなく、有島という名は留学先ハヴァフォード大学とハーバード大学関係者以外ではほとんど知られていなかった。にもかかわらず、アメリカメディアが日本とほぼ同時期に、しかも『ニューヨーク・タイムズ』をはじめとする複数の新聞が情死事件を速報したのは、栗田廣美がいみじくも指摘しているように、有島武郎という日本を代表する文学者への関心よりも、「心中」そのものへの好奇心にほかならない<sup>8</sup>。そうした興味本位の報道を正すべく、日本に長く住み、有島とも波多野秋子とも面識のあったマリアン・ルーシー女史は、第一報から七週間ほど経った八月二六日付『ザ・ニューヨーク・タイム』に新しい時代を代表する有島と波多野秋子が「日本古来」の心中に追い込まれた文化的思

7 ただし、本論文の目的は有島の情死事件が当時の朝鮮メディアにどのように映っていたのか、まだどのようにとらえていたのか、その一端を明らかにすることである。それゆえ日本の一地方の新聞として発行されていた『京城日報』は分析対象としない。

8 栗田廣美、前掲書(註5)に同じ。

想的背景を明らかにした長文の記事を寄稿し、有島の生と死への共感を示している。同様の視点は中国の周作人の追悼文にも見られる。

周作人が有島の死を知ったのは追悼文の冒頭に書いているように、七月九日付の日本の新聞である。この日の記事には、心中相手の女性の名とその夫である波多野春房のコメント、家族や知人に残した遺書の一部、有島が波多野秋子に送った手紙、有島と波多野秋子二人の知人の談話などが紹介されている。一方、事件の真相が明るみに出るに従って、話題の中心も有島の自殺の原因を追究する方向に傾き、新聞各社は社会各界から寄せられた賛否の議論を紹介しはじめた。それらの新聞を読んでいた周作人は有島の突然の死を追悼するとともに、「有島君はなぜ心中したのか」その理由が知りたいが、だからと言ってむやみな詮索、憶測はしたくないと、「追悼文」の中で次のように述べている。

われわれは彼らの死の由縁が知りたいが、判断を下したくはない。如何なる由縁であろうが、すでに自らの命で自己の感情または思想に報いた以上、ある種の厳粛さがわれわれの口を塞いでいる。われわれはもとより生を弄ぶべきでないが、それが故に死を侮蔑してはならない<sup>9</sup>。

一九一一年日本留学から帰国した周作人は、兄魯迅に一読を勧めるほど有島の文学と思想を高く評価し、その影響を強く受けていた。一九二〇年頃からは魯迅と共に有島の作品を次々と翻訳出版し、中国文壇への紹介を始めていたが、まさにその時、有島の情死が報じられたのである。しかし、事件直後の日本メディアの論調は、人妻波多野秋子との心中理由を追及するあまりに、「美しい魔性の人が有島を籠絡

した」というようなスキャンダラスな記事が中心であった。有島の死を「自己の感情または思想に報いた」ものだと見ていた周作人は、有島の死が勝手に議論されることに違和感を覚えずにはいられなかったであろう。だからこそ、新聞を読んだその日、直ちに追悼文を執筆し、有島の死を「侮蔑」してはならないと訴えたのである。

一方『東亜日報』も、記事の見出しを「自己の作品『死とその前後』をそのまま実現した有島武郎氏の情死事件」と付けていることから分かるように、有島の情死を「世間によくある前例」、すなわち心中沙汰とは一線を画すものであると、アメリカや中国メディアと同じく好意的な反応を示している。

そもそもキリスト教では宗教的に自殺が禁止されているし、儒教の伝統の強い朝鮮や中国でも自殺は忌み嫌われていた。ましてや「心中」となると、その傾向はより強かったと思われるが、アメリカや朝鮮、そして中国メディアは日本で起きた有島の情死事件をリアルタイムで取り上げていただけではなく、その死を悼んでいる。これだけでも注目に値するが、それ以上に驚くのは、情死の原因をめぐって賛否両論、毀誉褒貶の嵐が日本全国に巻き起こっていたその矢先、中国メディアは有島の死を「侮蔑」してはならないと主張し、アメリカと朝鮮では有島の死を単なる情死ではないと指摘するなど、有島の死に対する深い理解と同情を示していたのである。

しかし、周作人をはじめとする海外メディアの思いも空しく、有島の情死を巡る論争はエスカレートし、人妻と情死事件を起こした有島の作品を国語教科書から削除すべきであるという教科書問題に飛び火するなど、社会問題へと拡大されていった。決着を得ないまま議論ばかりが繰り返されていく中、マグニチュード七・九を記録する巨大地震が関東地方を襲い、二か

9 劉岸偉『周作人伝—ある知日派文人の精神史』（ミネルヴァ書房、2011年）183頁。

月間に渡ってメディアを賑わわした有島の情死事件は、東京の下町のほとんどを焼き尽くし、何十万人もの人々の命が押しつぶされるという未曾有の大惨劇に呑み込まれ、あっけなく幕を閉じてしまった。

無論、「不倫の死」と見なされていた有島の情死が許されたわけではない。大震災を契機として、生前有島が行っていた社会主義的活動、すなわち北海道の農場開放や大杉栄の日本脱出の費用を出していたことなどが「国民精神作興ニ関スル詔書」と抵触すると考えられ、有島の作品が国語教科書からことごとく消去される<sup>10</sup>など、関東大震災以後の有島に対する世間のまなざしは必ずしも好意的ではなかった。

### 3. 朝鮮メディアと有島の情死事件

ところが、有島の情死事件は北海道の農場開放とともに一九二〇年代の朝鮮にも大きな衝撃を与え、反響を巻き起こした。有島の情死が報道された直後、朝鮮社会への影響を懸念した基督教教育者の金昶済は、「有島氏の情死と人生観」と題する論文をキリスト教雑誌『青年』（九十九号、一九二三年九月）に寄稿し、「現今の困難な思想界において教育の任務に当たっている者」は朝鮮青年に人気の高い有島の情死問題について、「徹底した思想と公正な批判精神を持って臨まないと、第二、第三——の無数な犠牲者を出しかねない<sup>11</sup>」と危機感を募らせた。その危惧は的中し、有島の死後、それまでタブーとされていた情死や恋愛自殺が新聞の紙面を頻繁に飾るようになったのである。中でも、一九二六年八月四日、日本留学帰りの声楽家尹心恵と劇作家金祐鎮が不倫の愛を苦しめ、釜山に向かう連絡船から玄界灘に身を投げた「玄界灘情死事件」の衝撃は大きく、『東亜日

報』『毎日申報』『朝鮮日報』『京城日報』は無論、『東京朝日新聞』まで大々的に報道した。

注目すべきなのは当時の朝鮮メディアの反応である。三年前の有島武郎の情死事件と平壤妓生姜明花の情死事件に見せた深い同情と理解、そして哀悼の気持ちは欠片もなく、『東亜日報』をはじめとするほとんどのメディアは尹心恵と金祐鎮の情死を「個人の虚栄だけを追求しようとし<sup>12</sup>」たものにすぎないと、その行為を厳しく罵倒した。しかも、二人とも日本に留学していた経歴から、非難の矛先が留学生に絶大な人気を誇っていた有島に向けられたのである。

そこで本稿では、有島の情死を最後に日本ではほとんど注目されなくなった情死が、一九二〇年代の朝鮮社会を揺るがす文化アイコンとして浮上してきた背景に有島の情死事件が深くかかわっていたことを明らかにする。

## II. 有島武郎の情死をめぐる朝鮮メディア

### 1. 『東亜日報』と白樺派、そして有島武郎

一九二三年七月一〇日付『東亜日報』三面に報道された有島の情死事件が、文壇人には無論のこと、一般読者にも衝撃を与えたのは前述の通りである。当時、朝鮮では『東亜日報』の他に『朝鮮日報』『毎日申報』『大東新報』『時事新聞』といったハンゲル新聞<sup>13</sup>が発行されていたが、有島の情死事件に関心を示し、報道したのは白樺派のメンバーである柳宗悦とその妻兼子夫人の音楽活動を大々的に報道していた『東亜日報』である。

12 『東亜日報』1926年8月14日付。

13 李相哲「植民地統治下の抵抗ジャーナリズム－戦前朝鮮半島における「民族紙」の系譜を辿る」（『国際文化研究所紀要』第8号、2006）によれば、当時朝鮮国内で発行される日刊新聞の数は31種（1930年の統計）であり、その内訳は日本語新聞23種、英語新聞1種、朝鮮語新聞7種である。

10 高山亮二、前掲論文（註4）に同じ。

11 金昶済「有島氏の情死と人生観」（『青年』99号、1923年9月）。

朝鮮総督府の「文化政策」の一環として、一九二〇年に創刊された『東亜日報』（四月一日発行）は、創刊草々柳宗悦の「朝鮮人を想ふ」（『読売新聞』一九一九年五月二〇日～二四日）と「朝鮮の友に贈る書」（『改造』一九二〇年六月）の朝鮮語訳<sup>14</sup>を連載したのを皮切りに、創刊記念文化事業の一環として兼子夫人の音楽会（独唱会形式で行われた音楽会は一九二〇年七回、一九二一年七回、一九二三年四回、一九二四年四回、計二二回開催された）と、「朝鮮民族美術館」開館をめぐる柳宗悦の講演会、展覧会に関する一連の報道、そして武者小路実篤の「見知らぬ朝鮮兄弟へ」（一九二〇年七月一三日付）を掲載するなど、白樺派関連記事を度々報道した<sup>15</sup>。その結果、柳宗悦をはじめ武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉など白樺派の存在とその活動が文壇にとどまらず、世間一般にも広く知られるようになったのである。

中でも有島は、情死前から『死とその前後』（一九一七）と『小さき者へ』（一九一八）が一九二〇年と二一年に相次ぎ翻訳されていたこと、新文学の旗手として文壇をリードしていた金東仁と廉想渉が自身の小説「心浅き者よ」（一九一九）と「暗夜」（一九二二）で有島の『宣言』（一九一五）と『生まれ出づる悩み』（一九一八）について言及していたこと、そして北海道の農場解放が知識人の間に波紋をもたらしていたことなどによって、当時の朝鮮でも知名度の高い日本文学者なのであった。

## 2. 『東亜日報』が報じた情死事件の全貌



【図2】有島武郎の情死事件を報道した『東亜日報』（1923年7月10日付第3面）

その有島が、人妻と不倫の果てに縊死心中を遂げたのである。創刊当初から白樺派関連記事を報道してきた『東亜日報』は直ちに、【図2】のような二段抜きの見出しを付けて速報した。少し長いが、一九二三年当時、朝鮮メディアが有島の情死事件をどのように報道していたのか、またどのような感想を持っていたのか、その全容を紹介する。

日本文壇の重鎮として、巨万の財産と赫々たる門閥を塵芥のように投げ捨て、日本は無論のこと朝鮮の青年の間でも多くの敬愛を受けた有島武郎（四六）氏があふれる愛欲を胸に秘めたままその愛人たる秦野彰子（三十）女史と、軽井沢の別荘で首をつって未練がましいこの世に永遠の別れを告げた。その相手となる彰子女史は雑誌『中央公論』の婦人記者として、

英文学に深い素養のある女流文学者であった。有島の個人雑誌『泉』の誌上で発表する氏の思想に共鳴し、屢々氏を訪問する中に恋に落ちた。やがて彰子女史はその夫秦野春房氏とは疎遠になり、情死をする前から夫の許を離れて一人で東京都中野に移り住んだという。その痩せ細った両頬か

14 「朝鮮人を想ふ」の朝鮮語訳は1920年4月21日～18日まで、「朝鮮の友に贈る書」は同年4月19日から掲載されるが、20日に中止となった。

15 『朝鮮日報』など他社も柳宗悦の活動を報道したが、その量においても内容においても『東亜日報』には及ばなかった。

ら零れ落ちる可憐な表情が何とも言えない美しい美人であった。二人の情死が知られたのは、

七月七日未明であった。六月中旬、有島武郎氏は飄然家を出て、全く消息がなかったので家の者は大いに心配した。七月六日になっても一向に連絡がないのを心配した家族が、軽井沢の別荘番を別荘に遣わせたところ、いつ死んだか、幾重にも堅く閉じられた別荘階下の応接室でテーブルの上に椅子を積み重ねて、二人が首をつって死んでいるのが発見された。急報を聞いた本家と親族が軽井沢に駆け寄り、父親を亡くした幼い子供と師匠を失った青年男女、骨肉の死別を嘆く有島生馬、里見敦氏らも七日朝まで

馳せ集まって、血の気のない死体を取り囲んで悲嘆にくれた。二つの死体の上には好い香のする花が覆われていた。有島武郎氏の懐中から幾通の遺書が出てきた。いずれも似たような内容であったが、「この期になつて何事も申しません。誰がい、のも悪いのでもない。善につれ悪につれそれは運命が負ふべきもの、やうです」（秋子夫宛、筆者註）、「私のあなた方に告げ得る喜びは、死が外界の圧迫によつて寸毫も従はされてゐないといふことです、私達は最も自由に歓喜して死を迎へるのです。

軽井沢に列車の到着せんとする今も私達は笑ひながら楽しく語り合つています。」（弟妹諸君宛、筆者註）というようなことが述べられていた。最後に、置いていく三人の子供宛ての遺書があった。これらの諸事情を総合すると、二人の情死は世間によくある前例と違い、武郎氏の傑作『死とその前後』の舞台面を実現したような感じを起こさせてくれるものであった。有島武郎氏の死体は八日、質素な葬式

を済ませた後、青山墓地の片隅に埋葬された。一方、彰子女史の死体は夫秦野春房氏が引き取って、九日午前中に赤坂区内墓地に埋葬された。ひとときも離れることのない二人の死体は南北に引き離されて埋葬されてしまった。（拙訳、ただし「秋子夫宛」と「弟妹諸君宛」の二つの遺書は『朝日新聞』に掲載された原文を使用）

波多野秋子を「秦野彰子」、『婦人公論』を『中央公論』と表記するなど、一部事実誤認も見られるが、有島と波多野秋子の略歴、二人の出会いから失踪、そして遺体発見までの経緯と家族の悲しみ、葬式の様子などを二通の遺書を変えながら詳しく報じている。

この記事を書いた記者は、日本ではあまり読まれていない有島の『死とその前後』（一九一七）を読んでいるほど、かなり深く有島の文学と思想に理解を持っていたように思われる。そのせいもあろうが、有島と波多野秋子に対して非常に好意的な書き方をしており、二人の情死を単なる痴情劇にとどまらぬものとして見ている。

『死とその前後』は、一年一〇カ月の闘病の果て、一九一六年八月二日に亡くなった妻安子の死に取材した自伝的要素の強い戯曲である。全五場となるこの作品は、三人の子を残して天国に旅立つ若い妻の死を、現実の場面に妻の夢の場面を交錯させる設定となっているが、妻の夢の場面（第二場と第四場）で夫の過去、すなわち思想問題で警察に拘引されたこと、学生から排斥決議を突きつけられて教師を辞職したこと、結婚前の恋愛と人妻との恋などが告げられている。無論、これらはそのように生きたかかったことを描いただけであって<sup>16</sup>、当時の有島は社会主義者として大学を追われる

16 西垣勤「『死とその前後』論」（『有島武郎の作品（上）』右文書院、1995年）160頁。

こともなく、人妻と恋もしていなかった。しかし、妻と父を相次ぎ亡くした有島は、長年の宿願であった北海道の広大な農場を小作人たちに無償開放し、また夫のいる人妻とも恋をするなど、小説の中でしか生きることができなかった自己を実現しはじめたのである。

情死事件の記事を書くにあたって、おそらく有島の生涯とその作品を調べたはずである記者は、農場解放においても、恋愛においても、自己を実現した有島の思想と生き方に共鳴したのであろう。だからこそ、有島の死を単なる情死ではなく、「自己の作品『死とその前後』の舞台面をそのまま実現した」ものだと主張したのである。

有島の死を、「思想と生活との一致<sup>17)</sup>」の果てによるものと捉えるこのような見方が、情死直後の朝鮮メディアから指摘されていたことに驚きを禁じ得ないが、『東亜日報』の有島報道が単なる好奇心のレベルを超えていたことは、同紙面の人気コラム「휴지통(休紙桶)」(【図2】左下最下段)が如実に物語っている。

### 3. 有島武郎へのオマージュ

「休紙桶」は、その日のトップ記事の中から、特に総督府の非を衝く記事を題材にして編集長自らが論評を行ない<sup>18)</sup>、読者のカタルシスを刺激した『東亜日報』を代表する社会面コラムである。有島の情死事件が報道された七月一〇日付記事の主な見出しを見ると、「過誤した土木行政此亦重大問題」「社会主義と民族運動(七)」「(一面)」「排日感情依然漲溢」「排日運動緩和策講究」「国民同盟会排日対策問題で」「学生会取締発令」「布哇朝鮮人事情講演会」「(二面)」「布哇学生訪問団九日午前独立館へ」

「今日布哇訪問団バレーボール競技・布哇法問題音楽会」「自己の作品『死とその前後』の舞台面をそのまま実現した有島武郎氏の情死事件」「(三面)」「布哇学生団歓迎準備」「民大地方部遂安郡に組織」「(四面)」など、やはり総督府の統治方針に対する批判的な記事が目立つ。

ところが、当日の「休紙桶」が選んだ記事は『東亜日報』が社をあげて報道していた布哇祖国訪問団記事でも、総督府を批判する排日運動記事でもなく、一文学者の情死事件であった。以下、全文を見てみる。

有島武郎氏は日本文壇を代表する一流の中の一流として、彼の作品は広く各家庭で愛読されていた。▲彼は門閥と財産のある家で生まれ、貴族教育を受けた人であり、また彼が遵奉する主義は人道主義であった。▲それゆえに彼は日本の上流階級の間で紳士らしい紳士として名声が高く、その作品は感傷的な青年男女に好まれただけではなく、各家庭でも歓迎されていた。▲さらに現代の文人気風を軽薄視し、男女の愛のようなものはどんな場合を問わず馬鹿にする階級文学が幅を利かせる昨今の文壇風潮の下で、彼の作品だけは安心して読み進めることができた。▲それほどまでに信頼していた紳士が人妻と情死したと知らされた読者の心情は計り知れないものがあつたろう。人間の心ほど理解しがたいものはないと言うが、本当によく分からないのは人の心と言えよう。(拙訳)

わずか三一二字の本文に有島の生涯と思想、文学的業績が手際よく紹介されているばかりでなく、階級文学が幅を利かせるようになってからは有島の作品しか安心して読むことができなかったと有島文学に深い信頼を寄せ、そのような優れた文学者を失った読者の悲しみは計

17 高原二郎『有島武郎』(清水書院、1985年)190頁。

18 『東亜日報』1969年4月1日付「一九二〇年代、李瑞求氏<劇作家・当時社会部記者>」によれば、1920年代の「休紙桶」の執筆者は編集長の李相協である。

り知れないものがあるだろうと、有島の死に対する深い理解と同情が述べられている。

このコラムを執筆した編集長の李相協は、慶応義塾で学んだ開化期を代表する小説家兼ジャーナリストである。一九一二年日本留学から帰国した李相協は毎日申報社に入社して記者生活を送る傍ら、『再逢春』（一九一二年、原作は渡辺霞亭『相夫燐』一九〇四年）、『貞婦怨』（一九一四年、原作は黒岩涙香『捨小舟』一八九五年）、『海王星』（一九一五年、原作はデュマ『Comte de Monte Cristo』を翻案した黒岩涙香の『岩窟王』一九〇五年）といった翻案小説と、『なみだ』（一九一七年）、『貞操怨』（一九一八年）など新小説を次々と『毎日申報』に連載し、一躍人気作家となった。一九二〇年『東亜日報』を創刊した後は主にジャーナリストとして活躍したが、日本小説を翻案するほど日本文学と文化に心酔していた小説家らしく、有島の情死に際して朝鮮語新聞では唯一、事件の真相を詳細に報道して有島ファンを震撼させただけでなく、有島の生涯と文学的業績を讃える追悼文を自身の担当する人気コラム「休紙桶」に掲載し、その死を悼んだのである。

### Ⅲ. 開港と遊廓、そして情死

#### 1. メディアに報道された情死の主人公たち

前述の如く、儒教の伝統の強い朝鮮では自殺をタブー視し、とりわけ情死は公的に議論されたことがないほど忌み嫌われていた<sup>19</sup>。一九一〇年代半ば頃から情死という言葉が新聞に使われ始め、情死事件が新聞の紙面を飾るようにはなったものの、情死は依然生硬でかつ奇怪な事件であった。それゆえに有島の情死の第一報が伝えられた時、『東亜日報』を除くほかのメディアは一斉に沈黙し、有島文学の紹介に

積極的であった金東仁や廉想渉、朴鐘和ですらも誰一人として追悼のコメントを書かなかった。むしろ、キリスト教教育者金昶済は朝鮮青年に人気の高い有島の情死問題に対して「徹底した思想と公正な批判精神を持って臨まない」と、第二、第三——の無数の犠牲者を出すことになるだろう」と危機感を募らせていたことは前述の通りである。

つまり、有島の情死に理解を示す『東亜日報』の論調と違い、当時の朝鮮社会、とりわけ知識人のまなざしは必ずしも好意的ではなかったのである。にもかかわらず、『東亜日報』がほかの事件を差し置いて、有島の情死事件を詳細に報道したのは情死そのものへの興味もさることながら、情死の相手が英文学専攻の婦人記者というエリート女性であったことに強く好奇心を駆り立てられたものと思われる。

というのも、近代初の情死事件として、一九一四年七月二九日付『毎日申報』が仁川の敷島に住む住み込み雇員の青年趙昌植と娼妓の月色が夫婦になれないことを悲観に海に飛び込んで情死したというニュースを報じて以来、朝鮮で発生した情死事件の大半は娼妓や妓生、酌婦など、いわゆる売春業に従事する女性とその恋人が起こした事件だからである。

参考として、有島の情死事件が報道された一九二三年まで朝鮮メディアに取り上げられた情死事件をリストアップすると、次のようなものがある。

- 青年男女 情死怨恨。仁川海萬傾蒼波。悲しげに泣く二人の魂魄（『毎日申報』1914年7月29日付）
- 「情死する」と二人の美人を川中に投殺した悪木手、日本人（『朝鮮日報』1921年1月29日付）
- 鴨綠江上の情死騒ぎ。警部と娼妓。（『朝鮮日報』同年2月19日付）

19 権憲奎「情死だけみると、神聖なのかもしれない」（『新民』1926年9月）。



- 武輪は死亡、新町情死事件（『東亜日報』同年4月16日付）
- 新町で情死未遂。理髪師が新町娼妓と（『東亜日報』同年5月10日付）
- 噴谷で情死。学校教員と使用人の娘が情死（『朝鮮日報』同年5月25日付）
- 愚劣な婚約。結婚前に情死。結婚式を待つのが辛くて、一日も早く天国に行つて（『朝鮮日報』同年7月21日付）
- 日本人男女情死（『東亜日報』1922年7月17日付）
- 妾と情死。モルヒネを飲んで情死（『東亜日報』同年8月9日付）
- 捕鼠剤で男女情死。男は新聞記者、女は新町娼妓（『毎日申報』1922年11月2日付）
- 恋愛の果てに情死（『東亜日報』1923年1月2日付）
- 男女情死騒ぎ。家庭を築こうとしたがお金なくて飲毒自殺。（『朝鮮日報』同年1月8日付）
- 畢竟は黄泉で一緒になろうと情死した男女（『東亜日報』同年1月8日付）
- 無情な日本女性、情婦と情死しようと（『朝鮮日報』同年1月31日付）
- 青年男女の拳銃情死。二一歳青年男子と二十歳の青年女子が昨日未明龍山遊郭で拳銃が問題。（『朝鮮日報』同年2月10日付）
- 日本人男女情死。大田「春日亭」で（『東亜日報』同年3月27日付）
- 情死しようと飲毒。判事書記と娼妓が飲毒自殺を図る（『朝鮮日報』同年7月1日付）
- 一日に四名水中魂。龍山警察署はもう少し注意せよ。朝鮮人二名は誤って死亡、日本人二名は船に乗って情死（『朝鮮日報』1923年7月3日付）

- 日本人、流行の情死。ある店の店員が娼妓と情死（『朝鮮日報』同年7月25日付）
  - 新町遊郭で強制情死。商売に失敗した男が娼妓を殺し、自身も自殺（『朝鮮日報』同年8月12日付）
  - 悲観して情死（『東亜日報』同年8月24日付）
  - 青春男女の情死、女は死亡、男は危篤（『朝鮮日報』同年9月30日付）
  - 平壤遊郭で日本人男女拳銃死。内容は情死（『東亜日報』同年10月29日付）
  - 日本人の拳銃情死。男は死亡、女は重傷（『朝鮮日報』同年10月30日付）
  - 刺頸情死。深く愛し合った日本人男女、女を買うお金がなくて（『朝鮮日報』同年11月22日付）
  - 龍山遊郭の情死。日本人男女が（『東亜日報』同年11月22日付）
  - 姦夫姦婦の情死。男は二日後に死亡、女は危篤。（『朝鮮日報』同年12月17日付）
- （下線部分は在朝日本人の情死事件）

三〇近い事例を引用したのは、一九二〇年代初頭の朝鮮で巻き起こった情死ブームの特徴が端的に示されていたからである。その特徴とは、一九二〇年代半ばまでの朝鮮では情死はまったく新しい見慣れない事件であったこと、朝鮮人による情死事件が本格的に起こり始めたのは一九二一年以降であること、女性情死者の約七割（一九人）が娼妓（そのうち一〇人は日本人娼妓）であること、何よりも二八件の情死事件のうち四割（一一件）近くが日本人娼妓と在朝日本人の男性の間で決行された事件であり、そのほとんどが開港とともに日本から導入された遊廊で行われていたことだ。それゆえ当時の朝鮮の人々にとって情死は、日本人、し

かも遊廓の娼妓とその恋人が起こすものであると見做されていた。

ところが、エリート文学者として日本は無論、「朝鮮の青年たちの間でも多くの敬愛を受けた有島武郎」が、英文学専攻の美貌のエリート婦人記者と軽井沢の別荘で縊死情死を遂げたのである。遊廓の娼妓の情死しか知らなかった朝鮮の知識人たちは、社会的に崇拝されていたインテリ男女が愛ゆえに自殺するという行為に衝撃を隠せなかった。とりわけ、恋愛や結婚に悩む若い世代が受けたショックは大きく、死を以って己の愛を貫いた有島の行為を賛美し、模倣するカップルまで現われた。

有島の死から三年後の一九二六年八月四日、有島を崇拝していた日本留学帰りのエリートカップル、劇作家金祐鎮とソプラノ歌手尹心徳が不倫の愛を苦に玄界灘に身を投げた「玄界灘情死事件」はあまりにも有名な話である。世間は驚愕し、とりわけ情死を忌み嫌う知識人たちは一斉に金祐鎮と尹心恵を罵倒しただけではなく、二人に影響を及ぼした有島への批判を展開し始めたのである。その詳細は次号で述べることにし、本節ではまず、開港とともに日本からもたらされた情死という新しい自殺文化が日本人遊廓から朝鮮人遊廓に拡散し、やがて一般人を巻き込みながら朝鮮社会へ広がっていく過程について見ていく。

## 2. 遊廓の誕生とその影

一八七六年日朝修好条約後、釜山や仁川、元山といった朝鮮の主要都市が開港されると、西日本各地から商人や海運業者、白木綿業者が渡航してきた。そのうちこれらの業者とともに多数の日本人が朝鮮に移住するようになり、釜山など開港地を中心に日本人居留地が作られた。これらの居留地は日清・日露戦争をへて拡大し続けていったが、実は開港直後に渡航してきた人たちのほとんどは出稼ぎの独身男性なの

であった。それゆえ各地の居留地では風俗を乱す事件が度々起こり<sup>20</sup>、一八八六年（明治一七年）、在朝鮮臨時日本代理公使は売淫取締の規則を作り、日本人の売淫行為を取り締まった。

しかし、取締りだけでは増え続ける渡航者の性欲を処理できず、一九〇二年七月居留民の多い釜山に遊廓設置が許可されたのを皮切りに、仁川（同年一二月）、元山（一九〇三）、漢城（現ソウル一九〇四）、郡山（一九〇七）、大邱（一九〇八）、清津（一九〇九）、木浦・大田・新義州（一九一〇）などの居留地に次々と遊廓が設けられ、売春が制度化された。これらの遊廓に地理的に近い山口県や長崎県、熊本県などから日本人娼妓が渡ってきたのがほかならぬ「からゆきさん」である。その数は年々増え、一九〇八年末には京城で二四四人（七二七人）、仁川で一四一人（八四人）、釜山で一五一人（三五〇人）、平壤で一〇三人（八七人）、鎮南浦で四一人、群山で二九人、木浦で一八人（三三人）、元山で七八人（六〇人）、龍山で一六四人（二〇二人）の娼妓（酌婦）が働いていた<sup>21</sup>。



【図3】情死事件の舞台となった新町遊廓（1904年設置<sup>22</sup>）

20 川村湊『妓生一もの言う文化誌』（作品社、2001年）179頁。

21 孫禎穆「開港期韓国居留日本人の職業と売春業・高利貸金業」（『韓国学報』春号、1980年）。

22 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年）99頁。

次の【表1】は、一九二〇年から一九四〇年まで朝鮮各地で売春業に従事していた娼妓と芸妓、酌婦の人数である。ただし、橋谷弘氏によると、この数字は警察に登録された人数なので、私娼も含めた実数を表わすものではない<sup>23</sup>。

【表1】朝鮮における芸妓・娼妓・酌婦の人数

年	職種	日本人	朝鮮人	合計
1920	芸妓	1,336	1,224	2,560
	娼妓	2,289	1,400	6,249
	酌婦	705	868	1,573
1930	芸妓	2,156	2,274	4,430
	娼妓	1,833	1,370	3,203
	酌婦	442	1,241	1,683
1940	芸妓	2,280	6,023	8,303
	娼妓	1,777	2,157	3,934
	酌婦	216	1,400	1,616

出典：橋谷弘『帝国日本と植民地都市』（吉川弘文館、2004年）。

日本女性が明治初期から海外に売春婦として流出していたことはよく知られていた事実であるが、売春制度をも一緒に移植していったということを、この数字は雄弁に物語っている。

そもそも朝鮮半島では朝鮮王朝末期まで、公認あるいは黙認された売春制度というものではなく、妓生（芸妓）または妓女というものが存在していた。彼女たちは貞操を売って金品を受け取ることはあったものの、建前としては「酒席で世話をしながら芸妓を見せるのが本業であって、性交渉は付随的な行為<sup>24</sup>」とされていた。また、各地を放浪しながら門前で芸を披露して日銭を稼ぐ社堂牌と呼ばれる旅芸人たちは要請があれば隠密に売淫を行なったが、彼らの本業も「芸」と「技」にあって、売春は副業的なものに過ぎなかった<sup>25</sup>。つまり、売春を公認していた日本と違い、朝鮮半島では売春が公認され

たことがなく、あくまでも秘密裏になされていたものなのであった。とりわけ、儒教を国教にしていた朝鮮王朝は妓生にも「志操」や「節介」を求めているほど性道徳を厳しく管理し、その結果朝鮮社会では「売春を罪悪視<sup>26</sup>」する価値観が根付いてしまったのである。

ところが、開港とともに普及された遊廓文化によって、わずかなお金で性欲を処理することができるという便利さは瞬く間に朝鮮の男社会にも広がり、女と酒を求めて居留地の遊廓に入りする若者が現れ始めた。

日露戦争を境に、日本人娼妓では間に合わなくなった各地の遊廓が賃金の安い朝鮮人娼妓を雇うと、直接遊廓の経営に乗り出す朝鮮人業者も現われた。「売春は罪悪である、絶対に容赦することができない<sup>27</sup>」というそれまでの性に対する価値観が崩れ、併合直後の一九一〇年末には三七九の公娼の貸座敷のうち二三八箇所（日本一四一箇所、ロシアなど二箇所）を朝鮮人が経営するなど<sup>28</sup>、売春業の一般化が進められた。一九三〇年三月二日付『朝鮮日報』によれば、一九二九年新町遊廓の総売上は九七万二千七五八ウォンで、売春婦は一人当たり平均三千一三〇ウォンを稼いでいる。その盛況ぶりに目を見張るが、これという余暇文化がなかった当時、遊廓は享楽を求める多くの若者を取り込み、大盛況を遂げていたのである。

しかしその裏では、花柳病と言われる梅毒・淋病の蔓延をはじめ楼主の虐待に耐えられない娼妓の自殺と逃走、人身売買、娼妓と客との情死、密売淫に対する警察の取り締まりなど遊廓をめぐる事件が後を絶たず、社会的に大きな話題を呼んだ。中でも、情死は遊廓問題が本格化される前からメディアの関心を受けていた。

23 橋谷弘、前掲書（註22）99頁。

24 孫禎穆、前掲論文（註21）に同じ。

25 同上。

26 孫禎穆『日帝強占期 都市社会相研究』（一志社、1996年）466頁。

27 同上。

28 同上（441頁）。

一九一三年五月一三日から一〇月一日まで『毎日申報』に連載された翻案小説『長恨夢』（原作は尾崎紅葉『金色夜叉』一八九七～一九〇三）の下巻「第四章 清涼庵」（八月三〇付日～九月一日付）に描かれた情死をめぐるエピソードは注目に値する

#### IV. 情死文学としての翻案小説

##### 一 『金色夜叉』から『長恨夢』へ

周知の如く、『金色夜叉』は主人公の間貫一が、許嫁の鳴澤宮が富に目がくらんで変心したことを知り、高利貸になってお宮や社会に復讐を誓うが、貸付先の調査のために出かけた塩原温泉で偶然情死しようとする男女を助けたことを契機に凍りついた心が解け始めるところで中断する。一方、『長恨夢』は情死事件を契機として、それまでの人生を反省した李守一が高利貸を辞め、発狂した沈順愛を許して結婚するところで終わる。未完で終わる原作と違い、『長恨夢』はハッピー・エンドという独自の展開を見せている。

結末だけではない。許嫁の李守一を裏切って金重培（富山唯継）と結婚した沈順愛（お宮）は李守一を慕って、金重培とは寢床をともにせず純潔を守るなど、『長恨夢』には朝鮮社会に受容されるための様々な「工夫<sup>29</sup>」が凝らされているのである。次の文は、翻案者の趙重桓が『長恨夢』を翻案するに当たって、その経緯と目的、翻案態度などについて、雑誌『三千里』が主催した「外国文学座談会」の席で明かしたものである。

29 三枝壽勝「アジア理解講座「韓国文学を味わう」報告書」（国際交流基金アジアセンター、1997年、29頁）によれば、儒教社会である朝鮮では、普通の家庭人が結婚後に逃げ出してほかの人と結婚するということが絶対許されないことであると指摘し、翻案者の趙重桓は『金色夜叉』を翻案するにあたって、朝鮮社会に受け入れられるように様々な工夫を凝らしていたという。

あの時、私の歳は二七であった。今（一九三四年九月：筆者註）では二〇位の歳でも朝鮮の青年は、先輩の創作と翻訳を通して小説あるいは詩など、文芸的教養をたやすく摂取することができるが、二四、五年前の私たちが青年であった頃には、一片の小説、一篇の詩歌を読むことすら容易なことではなかった。（中略）朝鮮の青年男女の精神的糧を与えるため、この小説を「朝鮮のもの」として訳しておくべき日が来るであろうと、だから最後まで自分の手でこれを完成させたわけである<sup>30</sup>。（拙訳）

つまり、趙重桓は文芸的教養の不毛の時代であった一九一〇年代の朝鮮社会を啓蒙する意図のもと、『長恨夢』の翻案に取り組んだわけであるが、その際に以下の三点に留意したと述べている。

- (1) 事件に出てくる背景などを純朝鮮的な香りにするものにする。
- (2) 人物の名前も朝鮮人の名にすること。
- (3) プロットを損なわない程度に粉飾し、文彩と会話を自由にすること<sup>31</sup>。（拙訳）

確かに、原作と比較してみると、事件の背景や人物名、舞台、風俗などは純朝鮮式に変えられている。とりわけ、中巻から下巻に行くにつれて省略や縮約、潤色などプロットの改変が大胆に行われている。【表2】は『長恨夢』の下巻の目次を原作の『金色夜叉』と対比したものであるが、その特徴が端的に示されている。

30 趙一齋「翻訳邂逅－『長恨夢』と『双玉涙』」（『三千里』三千里社、1934年9月）234～236頁。

31 同上（234頁）。

【表2】『長恨夢』下巻目次

『長恨夢』	『金色夜叉』
第1章：忠告	続編第4章
第2章：謝罪	続編6章・第7章
第3章：悪夢	続編第8章
第4章：清涼庵	続編第1章～第5章
第5章：手紙	新続編第1章
第6章：富豪の乱行	『金色夜叉』終編（小栗 風葉作）第1章
第7章：病床	第2章 その他
第8章：成狂	第6章及び6の2
第9章：慈父の哀願	7の2
第10章：氷上姥	9の4
第11章：枯木生春	第10章
第12章：順愛の快復	第10章2の2
第13章：団欒な家庭	第11章

出典：李在銑「翻案小説考－『金色夜叉』の受容と変容の場合」（『韓国開化期小説研究』一潮閣、1975年）を参照に筆者作成。

李在銑氏が指摘しているように、『長恨夢』は翻訳に近い上巻と、翻訳と翻案を折衷した中巻に対して、下巻の場合は原作からの逸脱が著しく<sup>32</sup>、何よりも未完に終わった原作を「純朝鮮的な香りのする」ストーリーの作品に完結させている。それゆえ、

この作品は日本の作家、尾崎紅葉（一八六七～一九〇三）の小説『金色夜叉』を翻案したものとして、〔後半では作者の創意が加えられて、むしろ原作よりも内容の幅を広げることができた〕、愛情物を中心とした新聞小説の一典型を成し遂げた<sup>33</sup>。（下線は筆者、拙訳）

と、後半部分の創作性が高く評価されている。

ところが、愛より富を選んだ許嫁に衝撃を受けて金銭の鬼と化した李守一が、休養のために訪れた清涼庵で情死しようとする若い男女を救う情死エピソードが描かれた第四章だけは一切の「工夫」も改編も行われず、五章にもなる長い原作をそのまま移していたのである。

前述の情死事件リストからも分かるように、日本人居留地から始まった情死が朝鮮社会に認知され始めたのは一九二一年頃からである。つまり、『長恨夢』が連載中の一九一三年当時の人々にとって情死は日本人町の遊郭で行われる生硬で奇怪な事件なのであった。『毎日申報』の記者として取材に当たっていた趙重桓が、そのような事実を知らないはずがない。事実、彼は翻案過程で、儒教的価値観が幅を利かせている当時の朝鮮社会の現実を考慮し<sup>34</sup>、多くの場面を朝鮮の人々に受け入れられやすい、つまり当時の朝鮮社会で抵抗のない設定に変えている。

しかしながら、公的に議論されたことがないほど忌み嫌われていた情死の場面に関しては設定を変えることもなく、むしろ情死しようとする男女の心理などを詳細に訳している。

少し長くなるが、追い詰められた二人が苦しい恋の果てを語り合った後、ついに情死を決意し、毒を仰ごうとする場面を見てみよう。

32 李在銑「翻案小説考－『金色夜叉』の受容と変容の場合」（『韓国開化期小説研究』一潮閣、1975年）322頁。

33 全光鏞編「『長恨夢』解題」（『韓国新小説全集第九巻』乙西文化社、1968年）473頁。

34 三枝壽勝、前掲書（註29）29頁。



【図4】妓生の玉香と貧しい青年崔元甫が毒を仰いで死のうとするところを止めに入った李守一（「長恨夢」第99回『毎日申報』1913年9月6日付第4面）

『もう、そんなことは言わないでくれ。つらいだけだよ…。そんなことを聞くと、黄泉へ行く路の妨げになるから。二人が一緒に死ねば、この世で一緒に住むことも、あの世で一緒に住むことも同じことだよ。そんなに悲しく思わないでくれ、お互いに喜んで一緒に死のうよ。』

『私は喜んでいますがとも。このような格好で死ぬことなら喜んで死にます。私も残りの酒を飲みます』と一気に飲み干して、男の前に杯を差し出ししながら、

『あなた、一つお酌してくださいな』

注ぐ人の手も震え、受ける人の手も震え、あふれると又注ぎ、注げ直せば又あふれる。

男は玉香の耳元に唇をつけ、片手で彼女の腰を抱きしめながら、低い声で囁いた。

『玉香、気をしっかりしろ。』

『私のことは心配しないでください。』

『それでは、飲みましょう。』

『もたもたしても仕方がない。いっそう死んでしましましょう。』

男は鞆を開けて小さい紙袋を一つ取り出した。その中に入っている粉末こそ、二人を絶命させる代物なのである。玉香が盃を並べると、男は雪のように真っ白い粉を二つの盃に分け入れた。

雨はようやく上がり、軒の雨たれの音だけが聞こえる。

その男が薬監をとって、片方の盃にみなみと酒を注ぐと、玉香は両手を合わせ、聞きとれない小さな声で、

『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。』

玉香も男の前にある盃に震える手で酒を注ぎながら口の中では念仏を唱え続けた<sup>35</sup>。（拙訳、『金色夜叉』続編第四章に相当<sup>36</sup>）

この場面を読んだ当時の朝鮮読者は日本留学帰りの知識人や遊廓通いの一部の男性を除く、そのほとんどは程度の差こそあれ、「一緒に死ぬことがあっても離れまい」と情死に突き進もうとする二人のカップルの姿に違和感を覚えずにはいられなかったであろう。なぜなら、死を以て愛を貫くという発想はそれまでの朝鮮文学では一度も描かれたことのない全く新しい見慣れない設定だからである。

性そのものが罪悪視されていた儒教の国朝鮮社会では、男女間の愛情を描いたものは「淫書」とみなされ、その模倣すら許されず、特に情死を扱ったものは厳しく禁止されていた<sup>37</sup>。その結果、朝鮮社会は長く恋愛不在の世界になってしまったのであるが、この恋愛不在の世界に西欧の「自由恋愛思想」、すなわち男女の交際の自由と恋愛の自由が入ってきて、親の取

35 趙重桓『長恨夢』（乙西文化社、1968年）251～252頁。

36 尾崎紅葉『金色夜叉』（明治文学全集18『尾崎紅葉集』筑摩書房、1965年）309頁。

り決めによる結婚しか知らなかった人々の結婚観を根底から覆した。人々はこの新しい風習に戸惑いながらも、しだいにその風習を受け入れるようになったが、何百年に渡って束縛されていた儒教思想から完全に抜け出すことは難しかった。一八九四年甲午改革の際に廃止された早婚の風習は一向になくならず、一九一三年当時のほとんどの家では男の子が十代半ばになると、年上の女性と結婚させて早めに跡継ぎを設けるという習慣が行われていた。つまり、近代化によって自由恋愛が叫ばれるようにはなったものの、恋愛や結婚に関しては依然として本人の意思よりも家族や親の意向が重視されていた。まさにその時、『長恨夢』の連載が始まったのである。

三年間の日本留学を終えて、一九一〇年帰国した趙重桓は『毎日申報』の記者を勤めながら、同新聞に『双玉涙』（一九一二年、原作は菊池幽芳『己が罪』一八九九）、徳富蘆花の『不如帰』（一九一三）、『長恨夢』など日本文学の翻案・翻訳を立て続けに連載する傍ら、それらの作品を自らが旗揚げした劇団で次々と上演し、「文芸的教養」に飢えていた一九一〇年代の読者を刺激した。

中でも『長恨夢』は、富に目がくらんで大富豪に嫁いだ許嫁への衝撃から人間不信に陥った守一が、絶望のあまりに冷徹な高利貸となって拝金主義的な世の中への復讐を誓うという、それまでの朝鮮文学では見られない斬新な筋立

と、金重培がダイヤの指輪を嵌めて登場する冒頭のユンノリの場面や、順愛の裏切りにあった守一が彼女を蹴り倒す大同江岸の別れの場面といった劇的な構成によって、新聞連載途中から舞台公演<sup>38</sup>が始まるなど大人気を博し、朝鮮近代文学史上初のベストセラーになったことはよく知られた事実である。

それだけではない。新派劇の代表的レパトリーとなって全国各地で公演されると、妓生や女学生、主婦など女性読者に熱狂的に迎えられたのである<sup>39</sup>。『長恨夢』の舞台を見た女性たちは、許嫁を裏切ったことへの後悔から自殺を図ったり発狂したりするヒロインの順愛を憐れみ、同情した。その一方、愛し合いながらも夫婦になる望みが断たれてしまった妓生の玉香と貧しい青年崔元甫が死を以て愛を守ろうとする純粋な恋、特に妓生である玉香の崔元甫に対する一途な想いに深く感動し、その生き方に憧れる人たちが続出した。

前述の如く、『長恨夢』が新聞に連載される一九一三年当時、女性情死者のほとんどは新町（日本人町）の遊郭にいる日本人娼妓たちであった。が、『長恨夢』の大ヒットに伴って小説は無論、その舞台や映画<sup>40</sup>を見た人たち、とりわけ流行をリードし、女学生に先駆けて自由恋愛を謳歌していた妓生たちが情死の罠に嵌

37 金東旭『朝鮮文学史』（日本放送出版協会、1974年、288～290頁）は、「性に対する原罪意識をもっていない士大夫たちは、女性との間に盛り上がるかもしれない悲劇的なものに対して努めて目をそらした。いわば、運命・死・愛の背反・同族姦・近親姦など悲劇的な素材・主題を忠実に取り扱った作品は残っていない。宮女と士大夫の情死を描いた『雲英伝』は朝鮮文学の白眉である。だが、愛のためにささげ得るものはすべてささげた二人の熱烈な愛を夢の中でしか形象していない。そこに物足りなさがあるが、この婉曲な表現自体が士大夫文学の限界でもある」と指摘している。

38 『長恨夢』は連載途中の1913年7月27日には上巻を、同年8月8日から3日間は上巻と下巻が舞台公演された。また、同年11月にも再公演されるなど、1920年代半ばまで京城と地方の各地で広く公演された。

39 『長恨夢』が連載される1913年当時、『毎日申報』には劇場に女性たちが押しかけて演劇を楽しんでいる様子が度々報道されている。例えば、同年5月1日に「この日の俳優らは見事な演技で観客の目耳を引き、集中させた。特に（中略）涙を流す女性が非常に多く、時々熱烈な拍手喝采を送った」という内容の記事が掲載されたのを皮切りに、5月7日、9月5日、10月25日、12月13日の記事にも同様の記事が掲載されている。

40 『長恨夢』の映画化は、1920年4月24日に団成社で上演された連鎖劇『長恨夢』が最初である。以後、1926年3月18日、1928年11月29日、1931年3月13日に上映されて好評を博した。

り始めたのである。

吉川萍水がその著『妓生の物語』（一九三二年）の中で、「単に女に限らず、一体に朝鮮の人は生命がけの恋愛、殉教的な信仰といふ方面の情熱は頗る淡々としてゐる<sup>41</sup>」と指摘しているように、元来朝鮮の人は命を賭けるほど殉教的恋愛を好まず、「数百年間暴圧の手に自由を奪はれて、奴隷的に運命づけられた」妓生たちも愛のために命を捨てるという極端な選択をした場合はほとんどなかった。しかし、「時代の反映でポツへ妓生の世界にも心中沙汰が起り始めた」が、その彼女たちに『長恨夢』の情死場面が与えた影響は計り知れない。

注目すべきなのは、「色を売る」妓生の仕事をする玉香が好きな相手を一人と定め、命を賭けてその男と添い遂げようとするその姿が、結婚問題に悩む男性読者、とりわけ儒教的価値観から情死や自殺、さらには恋愛ですら忌み嫌っていた知識人たちにも大きな影響を与えたことだ。李光洙をはじめとする日本留学帰りの文学者たちはそれまでタブーであった情死モチーフを取り上げた作品<sup>42</sup>を次々と発表し、一九二〇年代初頭の朝鮮文壇に情死シンδροームを巻き起こしたが、その彼らが愛読し、深い影響を受けたのが『長恨夢』とその原作である『金色夜叉』なのである<sup>43</sup>。

41 吉川萍水『妓生物語』（半島自由評論社、1932年）178～179頁。

42 李光洙『開拓者』（1917～1918）、羅稲香『幻戯』（1922）、朴鐘和『死より痛い』（1923）、盧子泳『無限愛の金像』（1923）、玄鎮健『麗しの流し目』（1924）など。

43 情死モチーフだけではない。崔元植「『長恨夢』と慰安としての文学」（『民族文学の論理』創作と批評社、1982年）は、『長恨夢』は近代韓国文学における長編小説の形成、すなわち近代初の長編小説『無常』（李光洙、1917）から1920年代を代表する長編小説『幻戯』（羅稲香、1922）と『再生』（李光洙、1925）、そして1930年代を代表する長編小説『赤道』（玄鎮健、1934）に大きな影響を及ぼしていると指摘している。

## V. 自由恋愛を实践した妓生たち

『長恨夢』の影響は小説だけで終わらなかった。情死を決行する第二、第三の玉香と崔元甫が後を絶たなかったのである。

『長恨夢』の連載が終了した翌年、一九一四年七月二九日付『毎日申報』には、住込み傭員の若い青年趙昌植と娼妓の月色が海に飛び込んで情死したことが報道されている。いわゆる後追い自殺とも思われる情死事件が発生している。ただし、この事件への世間の関心はほとんどなく、新たな情死事件は報道されていない。

ところが、一九二〇年代に入ると状況は一変する。一九二一年五月一〇日、新町の妓生と理髪師の情死未遂事件を報道した『東亜日報』が、

新町で情死が見られるのはさほど珍しいことではないが、朝鮮男女の情死はあまりなかったことである。つまりところ、二人の愛が深くてひとときも離れていられないが、残念ながらお金がない。それ故に牡丹は遊郭から抜けられず、李慶聖も青楼に通う境遇でもない。結局、あのような極端な情死に至ったようだ<sup>44</sup>。（下線は筆者、拙訳）

と論評しているように、一九二一年頃から朝鮮男女の間で情死が大流行したのである。情死だけではない。「恋愛自殺も一風潮」（『東亜日報』一九二二年六月二二日付）という見出しが物語っているように、恋愛のもつれによる自殺関連記事も一九二二年から続出し、各新聞には毎日欠かさず自殺関連事件が掲載された。その数は年々増え始め、一九二〇年から一九四〇年までの『東亜日報』の記事中に「自殺」と「情死<sup>45</sup>」に分類される記事だけで五千件を超えて

44 「新町で情死未遂、理髪師が新町娼妓と」（『東亜日報』1921年5月10日付第3面）。



いる。それらを一瞥すると、インテリ男女から都市中下層労働者、学生、妓生・娼妓・酌婦は無論、家庭主婦に至るまで、実に様々な階層の人たちが愛のために情死や自殺を執行している。

中でも、一九二三年六月に起こった平壤出身の妓生康明花と大富豪の御曹司張炳天の情死事件は、「純潔かつ献身的な愛の象徴<sup>45</sup>」として世間の注目を集めた。康明花は張炳天の愛妾であったが、妓生であるという理由で家族からは結婚を反対されただけでなく、滞在中の日本では留学生から「朝鮮人の名誉を汚す売春婦」と集団リンチを受けるなど世間からも激しく罵倒された。そんな家族や社会に対して、康明花は自身の愛を立証しようと「ある時は指を切り、ある時は雲のような髪を切り落とし、ある時は肌に刀の刃を立て<sup>47</sup>」ることをも躊躇わなかった。しかしその甲斐もなく、世間は妓生の愛を認めてくれなかった。追い詰められた康明花は、

私は決してあなたから離れては生きていきません。しかし、あなたは私と一緒にいると家族からも世間からも仲間外れされます。ですから、愛のために、そしてあなたのために、私が自らの命を絶つことは正しいことです。（『東亜日報』一九二三年六月一六日付、拙訳）

と愛する人のために身を引くことを決意し、一九二三年六月一日、張炳天と出かけた温泉

温泉で殺鼠剤を飲んで自殺したのである。

夫婦になる望みが断たれた康明花が死に場所を求めて温泉に出かけ、恋人の前で服毒自殺を図ったという記事を読んだ当時の読者の中には、その死に方から『長恨夢』の玉香と崔元甫の情死は無論、その原作である『金色夜叉』のお静と狭山の心中を思い浮かべていたことは想像に難くない。

それはともかく、一カ月後の七月、張炳天が康明花の後を追って自殺を図ったが失敗し、その三カ月後の一〇月二九日に康明花と同じ方法で命を絶つと、世間は驚愕した。大富豪の御曹司が妓生との結婚に反対されたことを苦に自殺したことが理解できなかったからである。身分の限界を克服できなかった若いカップルの不憫な死は社会的に大きな反響を巻き起こした。



【図5】顔写真と共に「花のような身が命を落とすまでに彼女の生活にはどのような秘密があったのか—康明花の哀話」という見出しを付けて康明花の自殺を報道した『東亜日報』（1923年6月16日付第3面）。

新聞や雑誌、小説、映画などメディアは二人の情死を大々的に取り上げ、そのスキャンダラスな話題は日本や中国にまで報じられる<sup>48</sup>など、国際的にも注目を集めたが、問題は康明花の情死をめぐるメディアをはじめとする各界の反応である。生前、妓生であるという理由で「淫売婦」呼ばわりされていた康明花は、死後は「神聖な恋愛に犠牲になった絶大の佳人<sup>49</sup>」に祭り上げられたのである。その一端を見てみると、

45 ソ・ジョン『韓国文化と愛の系譜学 歴史に愛を問う』（イッブ、2011年、266頁）によれば、純粋な形の情死と見なされる事件は全体の20%にも達しないという。  
46 権ボトゥレ『1920年代初頭の文化と流行 恋愛の時代』（現実文化研究、2003年）189頁。  
47 「花のような身が命を落とすまでに彼女の生活にはどのような秘密があったのか—康明花の哀話」（『東亜日報』1923年6月16日付第3面）。

次のようなものがある。

まず、注目したいのは『東亜日報』の一連の報道である。康明花の死から四日後の六月一五日、彼女の顔写真とともに平壤の名妓と名高かった康明花が愛のために服毒自殺を遂げたと速報した。そして、翌一六日も同じく顔写真とともに「花のような身が命を落とすまで／彼女の生活にはどのような秘密があったのか—康明花の哀話」という見出しをつけて、恋人の出世のために髪を切り、指を切り落とし、貴金属と家をも売り払った挙句に命まで捨てた康明花を「純潔で献身的な愛の象徴」と褒め称えた。さらに、七月八日には新女性を代表する朝鮮初女流西洋画家兼文学者である羅蕙錫が康明花の自殺の報に接して執筆した長文の寄稿文を掲載し、一〇月三〇日付新聞では康明花の後を追って自殺した張炳天の死を報じるなど、康明花の自殺事件に並々ならぬ関心を示していた。

次に、植民地期を代表する総合雑誌『開闢』は一九二三年七月、「一瞥—万古貞烈前妓生康明花?」という時代世評のコラムで生前、康明花を妖婦と見做し、息子との結婚に反対していた「張一家は彼女を万古の烈女と称え、その舅となる張吉相は自ら供え物と祭文を用意し、死後孤魂を丁重に慰めた<sup>50)</sup>」と伝えている。

そして、前述の羅蕙錫は追悼文「康明花の自殺について」の中で、

私は自由恋愛問題が議論される時にはいつも朝鮮の女性の中で恋愛ができる人は妓生しかないと話してきた。女学生は男女

交際の経験があまりにも無さすぎる。それゆえこの朝鮮で恋愛ができるのはもっぱら妓生の世界だけである。妓生は女学生と違って、男性交際の十分な経験から男性を選ぶ判断力があり、また大勢の男の中でたった一人だけを好きになる機会がある。従って、その愛は自動的かつ永久的である。対する女学生は、そのような機会に恵まれていないが故にその愛は受動的かつ一時的である。だから、朝鮮の女性として真の愛が分かる者は妓生のほかにいないと言える。(『東亜日報』一九二三年七月八日付、拙訳)

と、朝鮮社会で恋愛ができるのは妓生しかない」と指摘した後、自由恋愛の末に自殺をした康明花の生き方は、様々な制約によって自由恋愛が実践できない新女性や女学生など一般女性に大きな影響を及ぼしたと述べている。しかしその一方では、「新しい世論を巻き起こして自分の恋愛を神聖化しようとする虚栄心に違いない。すなわち新式に流行する新思想に染まっているという非難は免れない」と指摘している。

一方、歴史家であり独立運動家であった申采浩は、康明花の自殺を「一言でいえば、肉の鬼である。自己の快楽のために身を投げたことに過ぎない。このような事件を、「神聖なる恋愛」「悲劇的な死」云々と言うが、呆れるばかりだ。(中略)若者たちよ、康明花の死に花の代わりに石を投げろ！ 君たちにはもっと辛く偉大なる事業があることを忘れるな！<sup>51)</sup>」と、康明花を肉体に耽溺した罪人に過ぎないと辛辣に批判した。

しかし、こうした批判の声は一部にとどまり、当時の朝鮮メディア、とりわけ『東亜日報』は康明花の自殺を「哀話」と脚色し、彼女を「悲

48 李海朝『康明花実記』(1924)、崔瓊植『康明花伝』(1925)、朴チヨロン『康明花の悲しみ』(1925)、カン・イヨン『(絶世美人)康明花伝』(1935)など、二人の恋愛を描いた小説が次々と刊行され、舞台公演が行われた。また、日本人監督早川孤舟による映画「悲恋の曲」(1924)も製作されるなど、康明花の情死事件は国内外に大きな反響を巻き起こした。

49 権ボドゥレ、前掲書(註46)267頁。

50 「一瞥」(『開闢』第37号、1923年7月号)。

51 申采浩「浪客の新年漫筆」(『東亜日報』1925年1月2日付)。

劇的な恋愛の主人公「純潔なる犠牲者」として祭り上げたのである<sup>52</sup>。

まさにその時、軽井沢で情死した有島の遺体が発見されたと報じられたのである。『東亜日報』がほかの新聞社を差し置いて有島の情死事件を真っ先に取り上げ、その死に深い理解を示す破格的な記事と、有島の生涯と文学的業績を讃えるコラムを掲載したのは、『東亜日報』が作り上げた康明花シンドロームと無関係ではあるまい。そのことについては次号に譲ることとする。

### 参考文献

- ・朝日新聞社編、1997年、『朝日新聞の記事に見る恋愛と結婚〔明治〕〔大正〕』、朝日新聞社
- ・尾崎紅葉、2003年、『金色夜叉（上）（下）』、岩波文庫
- ・菅野聡美、2001年、『消費される恋愛論－大正知識人と性』、青弓社
- ・栗田廣美、1998年、『亡命・有島武郎のアメリカー〈どこでもない所〉への旅』、石文書院
- ・権ボドゥレ、2003年、『1920年代初頭の文化と流行 恋愛の時代』、現実文化空間
- ・三枝壽勝、1996年、『アジア理解講座「韓国文学を味わう」報告書』、国際交流基金
- ・全光鏞編、1968年、『韓国新小説全集 卷九 趙一斎』、乙酉文化社
- ・ソ・ジヨン、2011年、『韓国文化と愛の系譜学 歴史に愛を問う』、イスツプ出版社
- ・孫禎穆、1996年、『日帝強占期 都市社会相研究』、一志社
- ・高田保馬、1931年、『情死の新研究』『中央公論』第516号
- ・橋谷弘、2004年、『帝国日本と植民地都市』、吉川弘文館
- ・福田清人編『明治文学全集18 尾崎紅葉集』、1965年、筑摩書房
- ・安川定男、1989年、『悲劇の知識人 有島武郎』、新典社
- ・山田有策、2009、『尾崎紅葉の「金色夜叉」、角川学芸出版
- ・吉川萍水、1932年、『妓生物語』、半島自由評論社
- ・劉岸偉、2011年、『周作人伝—ある知日派文人の精神史』ミネルヴァ書房

52 権ボドゥレ、前掲書（註46）267頁。